

経済・金融 フラッシュ

鉱工業生産 09年4月

～4-6月期は前期比で二桁増産の可能性も

経済調査部門 主任研究員 齋藤 太郎

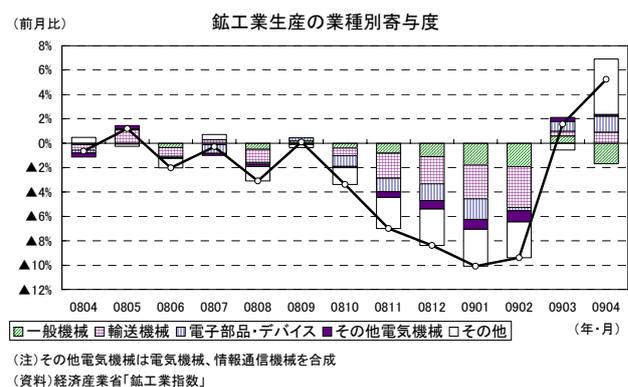
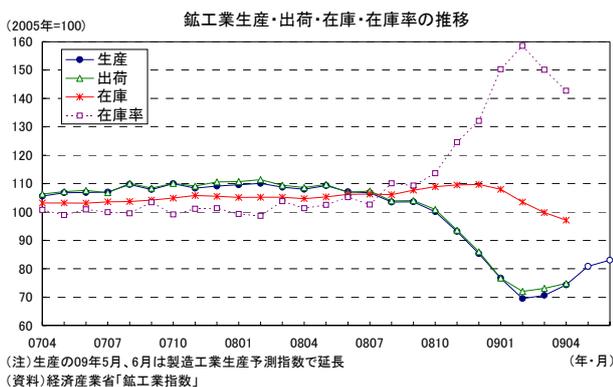
TEL:03-3512-1836 E-mail: tsaito@nli-research.co.jp

1. 増産ペースが加速

経済産業省が5月29日に公表した鉱工業指数によると、4月の鉱工業生産指数は前月比5.2%と2ヵ月連続の上昇となり、3月の同1.6%から上昇ペースが加速した。事前の市場予想（ロイター集計：前月比3.2%、当社予想は同4.3%）を上回る結果であった。出荷指数は前月比2.3%と2ヵ月連続の上昇、在庫指数は前月比▲2.7%と4ヵ月連続の低下となった。在庫率指数は前月比▲4.9%となり、この2ヵ月で▲10.0%の大幅低下となった。

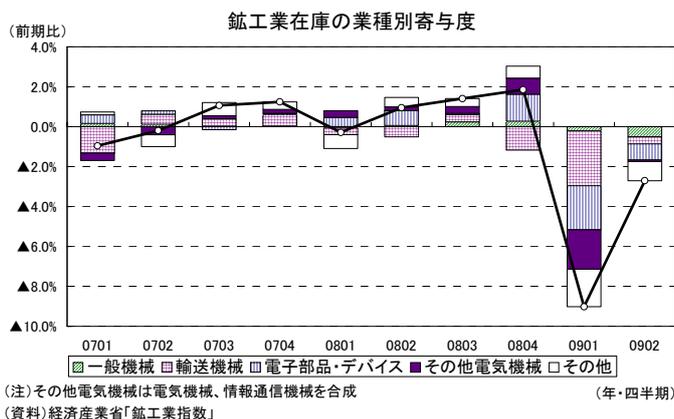
4月の生産を業種別に見ると、在庫調整が進展している電子部品・デバイスが前月比15.7%の大幅上昇となったほか、化学工業（除く医薬品）（前月比13.8%）、パルプ・紙・紙加工品（同10.5%）、非鉄金属（同12.6%）などの素材関連業種も二桁の伸びとなった。歴史的な減産が続いていた輸送機械は前月比7.0%（3月：同3.1%）と2ヵ月連続で上昇した。一方、設備投資の急速な落ち込みを反映し、一般機械は前月比▲14.5%の大幅低下となった。

速報段階で公表される16業種中、12業種が前月比で上昇、4業種が前月比で低下した。



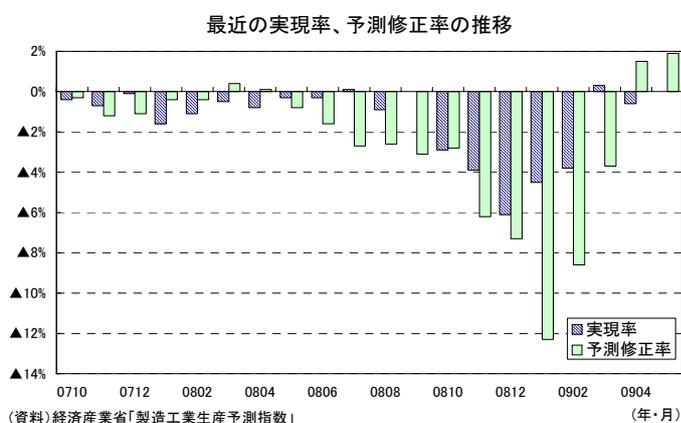
財別の出荷動向を見ると、設備投資の一致指標である資本財出荷（除く輸送機械）は1-3月期に前期比▲19.2%と急速に落ち込んだ後、4月も前月比▲14.7%の大幅減少となった。消費財出荷指数は、1-3月期の前期比▲20.4%の後、4月は前月比4.7%となった。1-3月期のGDP統計では、民間消費が前期比▲1.1%、設備投資が前期比▲10.4%とともに大きく落ち込んだ。4-6月期は、設備投資は引き続き減少するものの、民間消費は定額給付金の効果などもあり、若干持ち直すと予想している。

在庫指数は4ヵ月連続で低下し、この間の低下幅は▲11.5%に達した。特に、低下幅が大きい輸送機械、情報通信機械、電子部品・デバイスの在庫水準は直近のピーク時から4割前後低下している。企業が急激な生産調整を行う中、輸出が持ち直しの動きとなっているため、年明け以降在庫調整が一気に進展した。

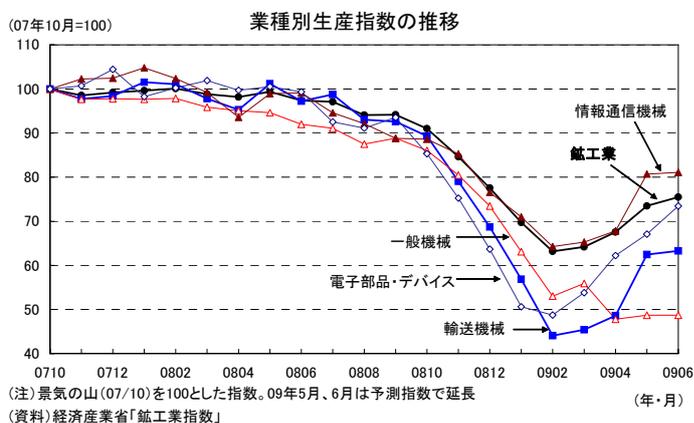


2. 4-6月期は前期比二桁増産の可能性も

製造工業生産予測指数は、5月が前月比8.8%、6月が同2.7%となった。生産計画の修正状況を示す実現率（4月）、予測修正率（5月）はそれぞれ▲0.6%、+1.9%となった。実現率は2ヵ月ぶりにマイナスとなったが、マイナス幅は小さい。昨年秋以降の生産計画が大幅に下方修正される局面は終了したと判断される。



業種別には、歴史的な減産を続けてきた輸送機械は3月に前月比3.1%と8ヵ月ぶりに増加した後、4月も同7.0%となったが、5月には同28.5%の大幅増産が計画されている（6月は同1.3%）。5月は、鉄鋼（同11.7%）、非鉄金属（同10.5%）、情報通信機械（同19.0%）も前月比二桁の伸びとなるなど、ほとんどの業種で増産が計画されている。



なお、輸送機械は昨年秋以降の大幅減産に伴い、生産水準が直近のピークから4割程度にまで落ち込んだが、5月、6月の生産計画が実現したとすれば、輸送機械の生産水準はピーク時の6割程度まで出戻ることになる。

4月の生産指数を5月、6月の予測指数で先延ばしすると、4-6月期は前期比9.8%の上昇となる。鉱工業生産が5四半期ぶりに前期比で増加となることは確実であり、生産計画の下方修正の動きが止まっていること、輸出が持ち直しに向かっていることなどを考慮すれば、前期比で二桁の伸びとなる可能性もあるだろう。

（お願い）本誌記載のデータは各種の情報源から入手・加工したものであり、その正確性と安全性を保証するものではありません。また、本誌は情報提供が目的であり、記載の意見や予測は、いかなる契約の締結や解約を勧誘するものではありません。